

内郷村報

天法人則
ニ從順ナルベシ

内郷村報の 六大使命

- 一、政黨政派を超越して、村力充實主義を標榜す。
- 二、村内外公私各機關の活動状況を報導し併せて其協調を計り、總體和協努力の實現を期す。
- 三、本村共済事業の徹底を期す。

- 四、村内の善事美行を表彰し、且之を獎勵す。
- 五、本村を本村出身者及本村關係者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。
- 六、尙餘力を以て、國民善導に當る。

國體觀念 涵養具體案 (二)

大内民惠

明治 天皇は、教育勅語に「我が臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」と仰せられた。而して忠と孝とを縦に溯れば、敬神となり、崇祖となり、其遺訓を奉々服膺する事が、忠良なる臣民であり、國體觀念の發揮となる事は、又云ふ迄もない事である。之は我國民たるものは、宗教上の所謂神或は佛を信仰するとは、異りたる意味に於て、何人とも違ふ事ではない。

明治天皇御製
我國は神のすまなりかみ祭る昔の手ぶりを忘るなよゆめ
天照神の御光りありてこそわが日本はくらざりけり
はるかにも仰がぬ日な我國のしつめたる伊勢の神垣
神風の伊勢の宮居を拜みての後こそかめ朝まつりこそ
神垣に朝まゐりてのるかな國と民とのやすからん世に
曉の露にぬれたる玉串をいまさぐらん神のみまへに
神垣に使なたて、豊年の秋の初穂を捧げつるかな

々々其祖先を奉祀せるもの幾何かあるのである。よしんば之があるとするも、毎朝禮拜するが如きものは殆ど皆無ではないかと思はれる。随つて之が禮拜の方式等は殆ど御存知ない事も亦勿論である。それにもかへはらず、文部省に對して、小學教師ハ國體ニ關スル明確ナル思想ト強キ信念トヲ有シ自ラ國體觀念ヲ體現シ全職員一致以テ之ガ涵養ニ努ムル云々と答申して居るが、我々には如何なる形に於て體現して居る事やら、とんとと了解に苦しむ。全く人を馬鹿にして居るのではなからぬのである。而して修身科の教材の如きは、前號に抄記した通りであつて、敬神崇祖に關する材料は、少量でしかあり、稀薄でもある。かうした教育は、入學の當初より開始すべきものなるに、尋常一學年には其教材なく、尋常二學年にはじめて、祖先をたうとべの初め、一課を入れたるが、其例話の如きは、稻生はるといふ婦人が、毎月一日十五日や祖先の命日に、祖先のお祭りをした事、及び人から珍らしい菓物などをもらふ事がある、佛壇に供へた

云々といふ事を擧げてあるに過ぎぬ。毎朝神佛（佛は祖先の靈を意味する）を拜すべき事
墓參 學年を通過して、何處にも見當らない。又尋常第四學年の、祝日、大祭日の課に、祝日大祭日は我國にまことに大切な日である。中ではおこやかな御儀式を行はれます、我等はよくその日のいはれをわきまへて忠君愛國の精神を養はなければなりません云々とあるが、之を云ひかへれば我等の大家家たる
皇室 宮中では、御儀式を行はせられるが其支族であり臣民である我々はたゞ何ももしないで其由來をわきまへてさへ居ればよいのであるといふ事になる。上御一人を始め奉り、高貴の方々が、齋戒沐浴せられ御親祭あらせらるゝ當日に臣下たる國民が、我關せず焉日曜同様に遊び暮らすといふが如きは、まことに恐れ多い、相濟まぬ事と思はれる。今日小學校も中學校も卒業した者が
祝日 大祭日の由來はどうかといふ問に對して完全に答へ得る者は幾人かあるだらうと思ふ。恐らく

先生方も同様であると思ふ茲に於て記者は、國體觀念敬神崇祖の精神涵養に關する具體案を提唱する事とする。
第一案 修身教科書に現存する以上、敬神崇祖に關する教材を、多量に且つ濃厚に加へる事である。殊に尋常第一學年の學校生活の初頭に於て、御眞影奉安所、神棚（小學校には必ず之を備ふる事とする）の拜禮によつて、敬神の教育を開き、同時に家庭生活に於て、毎朝父母に挨拶すると同時に、佛壇靈壇（教師の家庭は勿論各家庭に之を備ふる事は勿論である）を拜禮する事によつて、崇祖の教育を始むべきである。家庭に於ける神棚を拜禮する事は勿論である。而して高學年に進むに従つて、神佛禮拜の作法、墓參神社參拜に關する教材を加へる事である。
或宗教徒の家庭で、神棚もなければ、伊勢の大廟もおうけもないなどいふ向も少くないが、之は相濟まぬ事であると思ふ。又我村のさる訓導が、神も佛もあるものかなど、豪語した事か（勿論神棚も佛壇も備へない）近所の父兄が頗る奮慨して居るいふ事を聞いたが、もし仮りに事實とすれば不謹慎も甚だしきもので、そ

(以下二面につづく)

おのれ先づむべき道を進むこそ人のなされたつとめさば知れ
二郎さたけくらべをして
末の子さ丈を比べて買ひたるを
おさるきもじつ喜びもじつ

本紙發行は大内一家の事業にして、其の社説は子孫に對する遺言を養ふものなり。
發行所 大内民惠
印刷所 大内民惠
行發日 一回一月毎

內鄉村學事概報

本村内各種學校では、三

教育制度改革概論

(四六版二一頁 定價五十錢 郵稅六錢)

矢野恒太序 大内民惠著

(一面よりつゞく)

ふ者は、其職を辭すべきは勿論、日本の國籍を離脱すべきものであると思ふ。それに反して現本縣知事畑山氏が、來任の當時先づ第一に、福島市の縣社に當拜し、地方出張に際しては、先づ其土地の神社にお参りをする事にしてある様であるが、之はまことに結構な事であるが、一般縣民の大いに學ぶべき處であると思ふ。又恐れ多い次第ではあるが、我皇室に於かれては、兩陛下を始め奉り高貴の方々が、御日課として、敬神崇祖の聖範を垂れられつゝある由を、洩れ承る處であるが、全國民の大に鑒むべき次第であると思察し奉る。

第二案

從來大祭祝日中學校官廳等に於て、式を擧ぐるのは四方拜紀元節、天長節、明治節の四日に限られてあるが、之は他の祝祭日全部式を擧げて祝祭を行ひ、其由來を徹底すべきである。殊に春秋の皇靈祭の如きは上は

皇祖

皇宗、下は我等の祖先を祭祀する事に於て、特に意義深きものであり、神嘗祭に於ては、

天照皇大神に其年の新穀を奉る式を擧ぐるが如きは當然なきべからざる事と思はれる。農村などでは學校附近に特に神田を設けて、全校の職員兒童が、其穀物を作るといふ様にあつてほしいと思はるゝのであ

る。近頃偉人祭義士祭等々種々のお祭りをする事が流行する様であるが、勿論さうしたお祭りも結構にちがひはないが、

國家 の大祭祀日を等閑に附するが如きは、もつての外と思はれる。

教科書に載つたとか、文部省から訓令が出たとか、先生方は、やれ教材研究だ、やれ實施方法がどうだなど、騒ぎ出す事は、既往の實際に徴して明かな事で、それこそいやでもおうでもやらざるを得なくなるのである。實際今日の先生方は、甚だ失禮な申し分ではあるが、かうでもしなければ動かうとはしないのである。そうして最初は

形式 丈でも仕方がないが、だん／＼時日が立つにつれて、子供が學校でかういふ事をならつて來た、かうしなければならぬなど、いふ様になり、それが自然に各家庭の風習をなすに至り、知らず／＼の間に、國體觀念、敬神崇祖の精神を涵養するに至る事は、當然の結果であると思はれる。

以上の提案は、學制改革などとは異り、現時の省でも容易に出来る事あり、吾人

在鄉軍人會

の所謂教育職工や教育雜夫でも可能性のある事なのであるから、文部當局に向つて衷心から提言すると同時に、一般國民特に教育關係者に對して、大に覺醒猛省すべき事を、勸告する次第である。

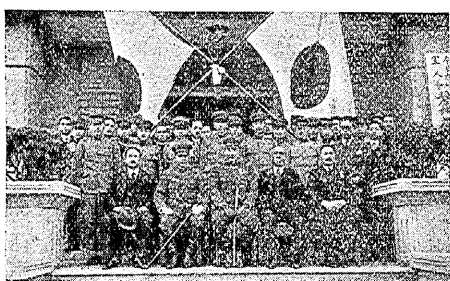
尙現行の修身國語歴史各

科の教科書の材料及内容の一々について、相當少なからざる意見を持つて居るが紙面がないので、割愛した事を斷つて置く。(終)

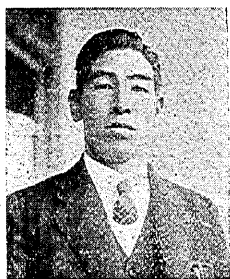
本號は三百枚を増刷して文部省及教育關係方面(贈呈して其反省を促す事とした。(四月一日)

磐炭分會發會式

本紙既報の通り、帝國在郷軍人会磐城炭礦分會は、諸般の準備全く成りたるを以て、三月十一日午後一時より淺野翁頌德紀念館に於て、其發會式を舉行了。



(影撮念紀式會發)



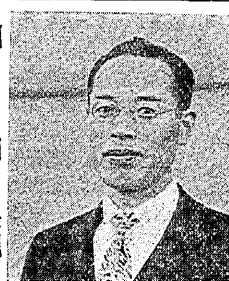
(小島分會長)

- 二、分會旗樹立 (小島、高野、松本)
- 三、勅諭捧讀 (小島)
- 四、分會長挨拶 (小島)
- 五、礦業所長挨拶 (濱崎部長代理)
- 六、聯隊區司令官訓示 (眞山周二大佐)
- 七、祝電朗讀 (大平)
- 八、來賓祝辭 (藤田聯分副長杉山內鄉分會長)
- 九、閉會の辭 (上原)
- 三、萬歲三唱 (司令官)

以上



(長副原上)



(長副保久長)

| | | | | |
|------|------|---------------|----------------|----------|
| 同 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 阿部善作 | 井上惠助 | 特務曹長 名久井錄三 | 同幹部候補生 土谷助二 | 同伍長高野金作 |
| | | | | 監事少尉荒川孝一 |

| | | | | | | | | |
|------|-------|------|----|-------|------|-------|------|-------|
| 同 | 同 | 評議員 | 班長 | 森田庄市 | 近野實 | 伊藤米治 | 鈴木六郎 | 加々美近二 |
| 同 | 同 | 同 | 同 | 大和田百枝 | 半野貞輔 | 羽田七五郎 | 早坂嘉七 | 遠藤忠義 |
| 長堀壯三 | 柳瀬菊次郎 | 三澤義則 | | | | | | |

| | | | |
|----|------|------|-------|
| 役員 | 分會長 | 副會長 | 理事 |
| 氏名 | 少尉 | 同 | 同 |
| | 小島良利 | 長久保尅 | 上原四郎 |
| | | | 小山準之進 |

◎本紙贊助金寄贈芳名

| | | | |
|-----|-----|----|-----|
| 金二圓 | 本宮 | 小沼 | 佐助 |
| 金二圓 | 上遠野 | 渡邊 | 義唯 |
| 金一圓 | 內郷 | 尾澤 | 梅太郎 |
| 金二圓 | 福島 | 高木 | 吉助 |

會 員 數
將校 一二、準士官 二
下士 一二、兵 四八八
計 五一三名
發會式當日出席者三四七

我國教育學界の權威

前京大總長小西重直博士
書を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地
ノ御試験ニ基ク眞摯憂國ノ大精神ヲ拜
味仕リ不思議激ニ打タレ申候云々。

發行所 日本評論社

取次所 内郷村報社

評論社

東京京橋三丁目

村報社

